

## ロスト・イン・アナザー・アメリカ プログラム A

### 21 世紀の映画への接近の試み

稲川方人

ジョージ・クルーニーが監督した『グッド・ナイト、グッド・ラック』やスピルバーグの『ミュンヘン』などを見ると、アメリカの映画人たちが「9・11」以後の自国の経験にどんな眼差しを持っているかがよくわかる。『宇宙戦争』も含めてだが、テロリズム＝恐怖の遍在性に対する彼らの冷静な姿勢がうかがえるからだ。むしろスピルバーグの場合はユダヤ的な共同体維持にますます拍車をかけて、「正義なきテロリズム」の決算を「家族」へと吸収していくわけだが……………（後略）

### He needs me...

松井宏

たとえば多くの論者から「スピルバーグ史上最低の」あるいは「映画史上最低の」とさえ形容される、『ミュンヘン』におけるあのラスト直前の並行モンタージュをどう考えればよいのだろうか。長い暗殺ミッションからマンハッタンの家族のもとへ戻って妻と性交に及ぶアヴナー（E・バナ）の姿と、そして、そのミッションの発端でもある「黒い九月」メンバーによるイスラエル人たちの殺戮シークエンスとの並行モンタージュである。もちろん後者のシーンをバナは直接見ておらず、つまりそれは一種の幻視と考えられる。そもそも「黒い九月」による事件はフィルム中幾度かバナに幻視として現れるのだが、決して顛末を一举に見せられるわけではなく、その都度徐々に時間軸上を進められており、件のラスト直前によって、ラストが、つまりイスラエル人たちの殺害される場面が見せられている。

（後略）

### 「eXistenZ」とは何か

大寺真輔

映画「eXistenZ」は、脊髄に穿たれた穴を通じて直接中枢神経にジャック・インする特殊なバーチャル・リアリティ・ゲームとして劇中に登場する「eXistenZ」がタイトルの由来であり、その名前そのものを黒板に書き記す場面から始められている。したがって、この映画にとって一義的に重要なのはこの言葉「eXistenZ」が示す意味であり、対象であり、そして同時にこの

言葉ないし文字そのものであるということが最初の段階で示されていると言えるだろう。では、「eXistenZ」とは何か。

(後略)

## Just Wake Up!

大寺眞輔

この映画では、様々な人物が登場し、それぞれが興味のある話題に関して、多彩な立場から互いに異なった、時には対立したり矛盾したりもする多くの意見を述べている。いやむしろ、主客が逆であって、そうした無数の会話によって埋め尽くされ織り上げられたものこそが、この作品なのだというべきだろう。そして、そこでは映画に関する話題も幾つか含まれているのだが、その中には、おおよそ次のような内容のものがあった。

(後略)

## 『ウェイクング・ライフ』

結城秀勇

この映画のタイトルである「waking life」という言葉が、ジュリー・デルピーとイーサン・ホークの会話の中に出てくる。デルピーは言う。いまここにこうしている私の人生は、実はある老婆が見た死の直前に人生を回想する夢に過ぎないのではないかと。私の「waking life」は彼女の記憶なのではないかと。日本語字幕では単に「人生」と訳されている彼女の「waking life」とは、死によって分割されるようなものでもないし、夢から覚めた現実の時間でもない。なぜなら、この映画の別の登場人物が語るように夢は死すら包括するのだし、その夢に私の人生は含まれているから。何十年かに及ぶひとつの人生が、肉体の死後 6~12 分だけ続く脳の動きでつくられる。過去から現在へという時間の連続性も、人生の確実性を保証したりはしない。

(後略)

## どこまで行ってもアメリカ

大寺眞輔

ポール・トーマス・アンダーソンの作品ではお馴染みのものとなった、複数のキャラクターによるアルトマン的マルチラインの物語構築は、この作品では完全に放棄されている。無論、アルトマンの影響は、例えばシェリー・デュバルによる実におかしく美しい「He needs me」をあげるまでもなく、幾つかの点で依然として明らかなのであるが、それ以上に、この作品でア

ンダーソンは、ユーモアと悲しみ、喜劇的なタッチとペシミスティックな真摯さを完璧に統合した、繊細かつシンプルなストーリーテリングに於いて見事な成功を収めていると言って良いだろう。『パンチドランク・ラブ』は、アンダーソンのキャリアの中でも、その一つの転換点を刻む見事な傑作になったと思う。

(後略)

## 未知のものである反復

『ビフォア・サンセット』／『ウェイキング・ライフ』のサブ・ストーリー

樋口泰人

80年代後半、レオス・カラックスやゴダールの映画のアイドルだったジュリー・デルピーは、90年代に入るとアメリカに渡り、結果的に不遇の時代を過ごす。といってもそれは観客として見る限りのことで、本人にとってそれがどんな意味を持っていたのか知るすべもない。ちょうどアメリカに渡る前後、女優だけでなく監督もしたいと彼女は語っていたはずで、その後監督としてもデビューしているから、彼女にとってアメリカは十分に実り多き土地でもあったはずだ。

(後略)